

国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業

(報告)

一般社団法人国立大学協会
一般社団法人技術同友会

【開催趣旨・目的】

産業界における女性技術者のエンパワーメント推進には、企業トップと組織管理職の深い理解とリーダーシップの強化が肝要である。そのための継続的な啓発活動の一環として、企業トップ並びに中間管理職を対象に女性技術者のエンパワーメント推進のためのセミナーを開催し、啓発活動として優秀な企業を表彰する制度や女性技術者のエンパワーメントに関する企業の達成度を測る仕組みなどの促進施策を紹介・提言する。また、産業界で必要とする女性技術者の母集団を拡大しようとする産業界の大学等への支援のあり方についても併せて紹介・提言する。

【シンポジウム等の名称・テーマ】

女性技術者のエンパワーメント推進に関するシンポジウム「女性技術者登用による産業競争力強化を目指して」

【日時】平成 26 年 2 月 12 日 (水) 13:00~17:00 (開場 12:30)

【場所】一橋講堂

【参加者数】364 名

【プログラム】

<開会挨拶①>別府 充彦氏(内閣府大臣官房審議官)
<開会挨拶②>濱口 道成氏(国立大学協会 副会長)
<開会挨拶③>立川 敬二氏(技術同友会代表理事)
<事例発表①> 神元佳子氏(キリン株式会社 人事部 多様性推進室 室長)
<事例発表②> 小谷美樹氏(株式会社リコー 人事本部 人事部採用センター 所長)
<事例発表③> 茅原英徳氏(株式会社NTTデータ 人事部 ダイバーシティ推進室長)
<事例発表④> 桐竹里佳氏(日産自動車株式会社 ダイバーシティディベロップメントオフィス 室長)
<事例発表⑤> 林 雅子氏(アサヒビール株式会社 人事部キャリア開発部ダイバーシティ担当部長)
休憩
<パネルディスカッション> ●コーディネーター 國井 秀子氏(芝浦工業大学学長補佐、男女共同参画推進室室長、大学院工学マネジメント研究科教授) ●パネリスト ①伊藤 源嗣氏(株式会社 IHI 相談役)

- ②佐々木則夫氏(株式会社東芝 取締役副会長)
- ③池 史彦氏(本田技研工業株式会社 代表取締役会長)
- ④濱口 道成氏(国立大学法人名古屋大学 総長)
- ⑤羽入佐和子氏(国立大学法人お茶の水女子大学 学長)
- ⑥小川 誠氏(経済産業省 大臣官房審議官 雇用・人材担当)
- ⑦有松 育子氏(文部科学省 大臣官房審議官 生涯学習政策局担当)

【参加者からの主な意見】

- ・社会全体の考え方を変えるための取り組みを産学官一体となって進める必要があると感じた。将来に向けて変革しなければ何も変わらない、スピード感を持っての取り組みが必要だと思う。
- ・先進的取り組みがよく理解でき、今後の参考にもなるのでこのような企画を継続願いたい。このようなイベント開催自体に意義があると強く感じた。
- ・各分野の話は大変勉強になり、良い刺激になった。こうした企画を繰り返し行うことで、社会の変化と取り組みが促進される筈である。
- ・ロールモデルや施策等盛り込んだ事例集のようなものを作成し、普及活動を展開してもらいたい。
- ・女性が、様々なライフイベントによって、仕事をセーブしたりキャリアが止まってしまうことがある。管理職として働きたい女性もいると思うが、家庭を優先させて仕事の負担を減らしたいと考えている女性もいる。そういった、女性のいろいろな考えを尊重し、それぞれの希望にあった待遇を実現できるようにしてほしい。
- ・なぜ女性が工学に魅力を感じ続けられないのか、あるいは感じ続けられたのかを突き詰めると解が見えてくるのではないか。
- ・技術者＝理系という考え方に疑問。理系に所属しなくても、科学や技術が好きという女性はたくさんおり（潜在的リケジョ）、技術者として活躍できる領域を周囲が広げていく努力が必要ではないか。大学側においても、文系でも数学や物理の講義を受けて卒業できるようにカリキュラムや単位制度を見直すべきではないか。

【シンポジウム等を通して得た成果（効果）】

産業界における女性技術者のエンパワーメント推進には、企業トップと組織管理職の深い理解とリーダーシップの強化が肝要であること、また女性技術者のエンパワーメントに関する企業の先進的取り組み事例が情報共有されたことで、参加者が置かれた個々の環境に置き換えて今後の具体的な取り組みについて考える良い契機となった。

【今後の課題】

シンポジウムの感想としては、全体を通して7割から8割の参加者が「とても良かった」「良かった」と回答している。ただ、自由意見欄では、「中小企業の例を紹介してほしい」「事例発表が長すぎる」「パネルディスカッションの時間が短すぎる」「質疑応答がないのは不満」といった意見が不満点として挙げられていた。継続した開催を期待する声も多く挙げられており、次回開催の際にはこれらの意見を反映させた企画としていくことが好ましいと考える。

以上